mediopos 3

2015.1.8～2015.1.29

【神秘学ポエジー～風遊戯　第 11 集】

media-photo-poesie ヴァージョン

神秘学遊戯団

mediopos-51
2015.1.8

■加藤秀俊『メディアの発生／聖と俗をむすぶもの』(中央公論新社 2009.5)
「イタコや「市女」によって代表される日本の根源的なメディアは、おのずからこの世に「むす」ものであり、その「むした」ものが森羅万象を「むすぶ」作用をはたしてきたのではあるまいか。おそらく日本の「カミ」は「ヒト」や事物を「むすび」、そこからうまれたものをさらに他の異質なものと「むすび」、その循環のなかで世界は生成してゆくのである。そんなことを、わたしは粉雪につつまれた山形の初市のにぎわいのなか、滑りやすい足もとをふみしめながらかんがえたのであった。

１は分かれて２となる
２はむすばれて３となる

３が１となり
またそれが分かれて２となる

２となったものは
またむすばれて３となる

１なる世界は展開しない
２となってはじめて動き始める

けれど分かれたものは
そのままではどこにも行けない

むすばれてはじめて
世界は生成してゆく

三位一体の自己展開として
次々と三位一体を生み出しながら

やがてカミとヒトもむすばれるだろう
聖と俗の彼岸の場所で

mediopos-52
2015.1.9

■近藤譲「聴く人」(アルテスパブリッシング　2013.12)
「今日、私たちが生活する世界では、あらゆる面で、「目的化」が促進されている。芸術も、教育も、研究活動も、もちろんその例外ではない。たしかに、目的性は、人の生の組織化と方向づけに資するものであるかもしれない。しかしそうした目的性が、社会やその諸制度から個人に対して与えられるとき（そして、それこそが今日の社会の状況なのだが)、それはむしろ、個人の生の基本的な自由を束縛して、既存の社会・文化システムに組み込むための抑圧的な力として作用する。／人がみずから生きるための自由、すなわち智の自由は、むしろ、目的性を脱した行為の内に培われる。」

問う人がいる
何のために

目的がなければ
どこにも行けないからだ

何のために
そしてレールが敷かれる

人は目的地に向かって
運んでくれる乗り物に乗り込む

うまくすれば
目的地に運んでくれるだろう

目的地に着いたとき
また問いがでるだろう

何のために
そして次の目的地へと向かう

そしてすべてが道具になる
目的という名の制度のための

生きることも何かの目的の道具になる
知ることも信じることも愛することでさえ

ただじっと耳を澄ませてはいけないか
ただただうれしく歌ってはいけないか

mediopos-53
2015.1.10

知っているものは
知られていない

見ているものは
見られていない

聞こえているものは
聞かれていない

身近にあるものは
遠いところにある

永遠は彼方ではなく
この日常のなかにある

私は私をさがす
けれどどこにも見つからない

私はふりむく
するとそこに私がいる

■ジョン・オドノヒュウ『アナム・カラ／ケルトの知恵』（角川書店　2000.8）
「永遠なるものは、どこか距離を隔てたところにあるのではない。いや、人にとってこれ以上に近しいものはまたとない。このことはケルトの詩句に巧みに表現されている。「永遠なる青春の地は家の裏手、そこは肥沃な麗しの土地」永遠の世界と有限の世界は平行してあるのではなく、渾然と融合しているのである。ゲール語の美しい言葉、フィイテ・フエイテも「互いに織り込まれ、あざなわれ」ている意味で、同じ含みである。／目に見える日常生活の背後に隠れて、永遠の運命は人の行動や思考を操っている。人間精神の覚醒は、これすなわち帰郷である。ところが、皮肉にも親近感は時として帰郷の喜びを妨げる。人はものに馴れると感動が色褪せ、興味を失うからである。ヘーゲルは言っている。「総じて身近なものは、まさに身近であるためによく知られることがない」言い得て妙とはこのことか。慣れ親しんだものの背後には、目新しいものが待ち受けている。毎日暮らしている家や、一緒に住んでいる家族についてもこれは言える。友愛や人間関係は、親近感から来る神経の鈍磨に大きく阻害されるのである。我々はとかく人の強烈な個性や風景の美観を見慣れた形象に還元しがちだが、その見慣れたものは外面でしかない。親近感は神秘を手懐け、意のままにすることを人に許して、結局は忘れさせる。人は目に見える外形と馴れ合って、その向こうにいる他者や、未知の騒擾には無関心である。親近感は隠微で質の高い人間疎外の形態と言わざるを得ない。」

mediopos-54
2015.1.10

場所が生かす
場所に生かされる

個が生きる
個が生かされる

場所と個が出会う
場所と個がむすぶ

わたしという不思議
あなたという不思議

わたしとあなたが出会う
わたしとあなたがむすぶ

■多田・フォン・トゥビッケル　房代『響きの器』(人間と歴史社　2000.9)
「ひとつの空間を共有していくうえで、私はドイツの人々と大きく異なることに気づきます。／たとえば日本では、空間（時間的、物理的）を共有する場合、まず共有できる空間を持つことに意味があり、そしてこの空間で、個々は自由に独立して動き回る、ということをしばしば体験します。そこには「間」という感覚が生きて居ると思われます。(・・・）／一方、Ｉこの「個の独立」というのは、ドイツの人々にとって重要事項であり、孤立した個が存在し、その共通性とは、行動や意見の一致によってその空間、またはひとつのものを作り出すこと。なかなか表現がむずかしいのですが、私はそう実感しています。」

mediopos-55
2015.1.11

■坂本貴志『秘教的伝統とドイツ近代／ヘルメス、オルフェウス、ピュタゴラスの文化史的変奏』
（ぷねうま舎　2014.2）
「シラーは宇宙の無限性というものを十分に意識していた。『世界の大きさ』（1782）という詩の中で、「太陽を渡り歩く者（Sonnenwanderer）」である「私」は、造物主がカオスから創りなした宇宙の果てを見極めるべく巡礼の旅を続ける。しかし、「私」は詩の中で他の巡礼者から星々のつきる果てないことを告げられて、宇宙の無限性を知る。そしてこの無限の宇宙は、「呼吸するもの」つまりは被造物がどこまでもつきることのない世界として描かれる。／シラーは『友情』の中でもまた霊的存在たちが抱き合って「様々な恒星系（Systemen）」を構成すると歌うように、この詩句の表現を、この時代の常識としての「世界の複数性」という観念からの類推によって成り立たせている。シラーは無限なる宇宙と世界の複数性という、この時代に通底する近代的な宇宙観に基づいて詩作を行った。そして地球以外の、他の天体上の住民の存在を想い描いていた。」

握れば一点となり
開けば無限となり

（生まれ死に生まれ死に）

宇宙は無限を呼吸し
無窮の音楽を奏で続ける

（はてない調べのなかを）

われらもまた無限を呼吸する
宇宙の巡礼者であるならば

（祈りの声を響かせながら）

ときに星たちの時間を生き
ときに大地の時間を生きながら

（どこまでもどこまでも）

限りない存在の連鎖を巡る
永遠の旅人であると知らねばならない

mediopos-56
2015.1.12

■ミルチャ・エリアーデ『迷宮の試練／エリアーデ 自身を語る』
(聞き手：クロード＝アンケ・ロケ　訳：住谷春也　作品社　2009.1)
「R◇あなたはしばしば人生を、あなたの人生を迷宮にたとえました。いま、その迷宮についてどう言われますか？／E◆迷宮、それはある中心を、ある富を、ある意味作用を、時には魔法で守るものです。そこへ入っていくことは、テセウスの神話で分かるように、一つの通過儀礼になります。このシンボリズムは、たくさんの試練を経て自己の中心へ、自分自身へ、インドの用語でいえばアートマンへと進むあらゆる実存のモデルです。何度も、私は迷宮から出ることを、あるいはあの糸を見出すことを意識しました。自分が絶望し、抑圧され、迷っていると感じていました……。もちろん「自分は迷宮をさまよっている」と思っていたのではありません。しかし、最後には、ある迷宮から勝ち誇って出てきたと感じました。この経験はだれでも知っています。しかしもう一つ言わねばならないのは、人生はただ一つの迷宮でできているのではないということです。試練は更新されます。／R◇あなたは中心へ到達しましたか？／E◆何度もそこへ到達したと確信し、そうして達することで多くを学び、自分を認識しました。そのあとで、また迷いました。天使でも英雄でもない、それがわれわれ人間の条件です。中心に達すると、豊かになり、意識は広く深くなり、すべてが明らかに、意味をもつ。しかし人生は続くのです。別の迷宮、別の出会い、別の類の別の次元の試練……。」

迷宮を出でて
新たな迷宮へ

第一のアリアドネの糸から
第二・第三のアリアドネの糸へ

中心はつねに変わり
試練はかぎりなき道を示し

不安にゆれながら道を歩み
己を焼き尽くしまた甦り

私は私を失い私になり
また私を失い私になり

内なる迷宮に踏み迷い
外なる迷宮をさまよい

生と死はくるくると入れかわり
永遠と刹那をともに生きるさらなる迷宮へ

mediopos-57
2015.1.12

だから人はそれを逆説的に
わざわざ自分に見せるようにまな板の上に置く
料理なんかできないんだと自分を誤魔化すために

無意識は往々にして目の前に課題を引き寄せる
そしてそれをわざわざ自分で目の前に置く
自分で自分を混乱させるためにこそ

父が男性がまな板の上に置かれ
母が女性がまな板の上に置かれ
そして全肯定か全否定かの反復横跳びを開始する

自分にとって一番難しいことに立ち向かうためには
自由な想像力の翼が必要だ
人は自由を恐れみずからを檻の中に閉じ込める

生きるということは
自分にとって一番難しいことに想像力で向かうことだ
そうすることで新しい場所へと向かうことができる

■宇野常寛「あたらしい駅のかたちについて、彼は想像することもできない」
(『楽器と武器だけが人を殺すことができる』(メディアファクトリー 2014.12) 所収)
「『ねじまき鳥クロニクル』の主人公の妻しかり、『1Q84』の青豆しかり――ここに、僕は春樹が現時点で示している「コミットメント」のモデルの脆弱さを見る。ビッグ・ブラザーはもう出番がない――近代的な「大きな物語」が失効した後の、あたらしいコミットメントのかたち。しかり春樹の提示するそれは自分のことを無条件に承認してくれる「母」的な存在にコミットメントに伴う責任を転嫁するという性差別構造に依存した単純なモデルでしかない。ここに僕は、「治者」であることを唱えながらも家では妻を殴っていた/そして妻の後を追うように自ら命を絶った江藤淳から、正義の執行とその責任を常に自分を無条件に承認する女性に転嫁し続ける村上春樹まで続く戦後の文学的想像力が乗り上げてしまった巨大な暗礁――肥大した母性と矮小な父性の結託――を感じざるをえないのだ。そして「空位の玉座を守る」江藤淳的な「成熟」も、春樹的な「母=妻への依存と搾取」も、現代に要求されるあたらしいコミットメントのモデルとしてはおおよそ説得力をもたない。それはどちらも性差別的な回路を用いた「成熟」「コミットメント」の偽装に過ぎないのだから。」
「どんな駅をつくるのか、それは間違いなく思想の問題だ。「駅」をつくることの延長線上にあるものが何か、この偉大な作家には見えていない。比喩に噛みついて矮小化しているのではない。これは想像力の問題だ。比喩の表面に渦巻く世界観の問題だ。「多崎つくる」はほんとうは自分がはっきりした色彩を帯びていることも、自分がどこに立っているかも分かっていたはずだ。分からないふりをすることで、彼と春樹は一番大事なところから、そして一番難しいことから逃げている。」

mediopos-58
2015.1.13

永遠の少年よ
永遠の途上を旅する者よ

どこまでも道はつづき
目的地はつねに更新されることを知れ

完成という蜃気楼を眺めながら
成熟という迷宮を旅する者よ

私が私であることは
繰り返し新たな私になるということだ

内なる永遠の少年とともに
永遠の彼方へのはるかな旅を

■河本英夫『<わたし>の哲学／オートポイエーシス入門』（角川選書　平成 26 年 5 月）
「私が二十五年にわたって取り組んできたオートポイエーシス〔自己制作〕とは、繰り返しみずからになり続けるシステムである。日々新たになり続けるということは、たんに毎日目覚めるようなことではなく、目覚めるたびにダムに水が溜まっていくようなものでもない。／このシステムの中心的な意義は、各人の能力を最大限に発揮できるようにするだけではなく、新たな能力を形成していくことでもある。これは哲学がつねに願い、狙っては的を外してきた課題でもある。オートポイエーシスは、あるいはオートポイエーシスの哲学は、この新たな能力の形成そのものに照準をあてている。能力を最大限に発揮し、新たな能力を形成し続けるシステムーー。こうしたあり方の典型を求めると、それが少年という経験のモードになる。／オートポイエーシスは、自分になるだけではなく、そのつど世界内で個体化し、固有化することでもあるので、自分自身を世界内の一個の不連続点とすることでもある。こうしたことから自己のかけがえのなさ、否応のなさが生まれる。しかしオートポイエーシスは、こうしたかけがえのなさに満足し、自足するような仕組みではない。自分自身を作り続けていくのがオートポイエーシスであり、そこには固有の工夫があるに違いない。

mediopos-59
2015.1.13

月をみる
その目のなかの
月をみる

そなたの目には
月が住み
満ちては欠けて

月は詠う
月に住むもの
月を照らすもの

月を詠う
月を愛でるもの
月を生きるもの

わが月の満ちてはかけて
一年（ひととせ）の節のうつりの
秘めやかな祀り

■『月を愛でる　うつろいと輝きの美』（編集：逸翁美術館／思文閣出版　2014.10）
公益財団法人 冷泉家時雨亭文庫 理事長 冷泉為人「日本人の「月」の美学」より
「月は、新月、上弦の月、満月、下弦の月、三十日月、そしてまた新月となる。これｇは一ヶ月、そしてこれを一二回繰り返して一年が過ぎ、それを毎年繰り返している。これが日本人の基本的生活の営為である。／この「雪月花」あるいは「花鳥風月」に、日本人はいったいどのようにし接しているのであろうか。それは、西洋人が自然と対峙し、自然を理知的に論理的に把握し、その態度は客観的であって、自然を人間に益するように組み替えていくのに対して、日本人は自然と親和的に接し、自然を情緒的に理解し、極めて主観的に文学的に捉え、自然とともに生活し共存していくように考え、行動している。／（・・・）また我々日本人は、自然気象の循環することをそのまま素直に「受容する態度」がある。そこから「諦念」の心、精神が起こる。反対に現在、「今ここに」を謳歌する「現実的な精神」「現世利益」がある。／したがってその一年の生活を「ハレ」と「ケ」に分けて、生活そのものを「節づける」ことを行ってきている。つまりこの「節」は「季節」や「節季」、「五節句」「二十四節」などの「節」であり、さらに一年の折々に「年中行事」すなわち「祭礼」を行っている。これも一つの「節」である。この「節づけ」の「節」を一年の「ハレ」の日と定め、日常生活の「ケ」の生活を「節づけ」、一年を無事に過ごせるようにしてきているのである。」

mediopos-60
2015.1.14

■ポール・ヴァレリー『レオナルド・ダ・ヴィンチ論』(ちくま学芸文庫　2013.9)
「心的映像という現象はほとんど研究されていない。この現象は重要なものだという印象を、私はいまも抱いている。私が言いたいのは、この現象に固有のいくつかの法則は本質的なものであり、また異常なまでの普遍性をもっているということである。そしてイメージの多様な変化、その多様な変化に課されているさまざまなイメージの制限、応答＝イメージの自発的な産出、言い換えれば補完としておこなわれるイメージの産出、これらによって、夢の世界、神秘的状態の世界、類推による演繹の世界という、相互にはっきり異なったいくつかの世界を結びあわせることができるようになる、ということである。」

形を描くためには
まず心のなかに
形をつくらねばならない

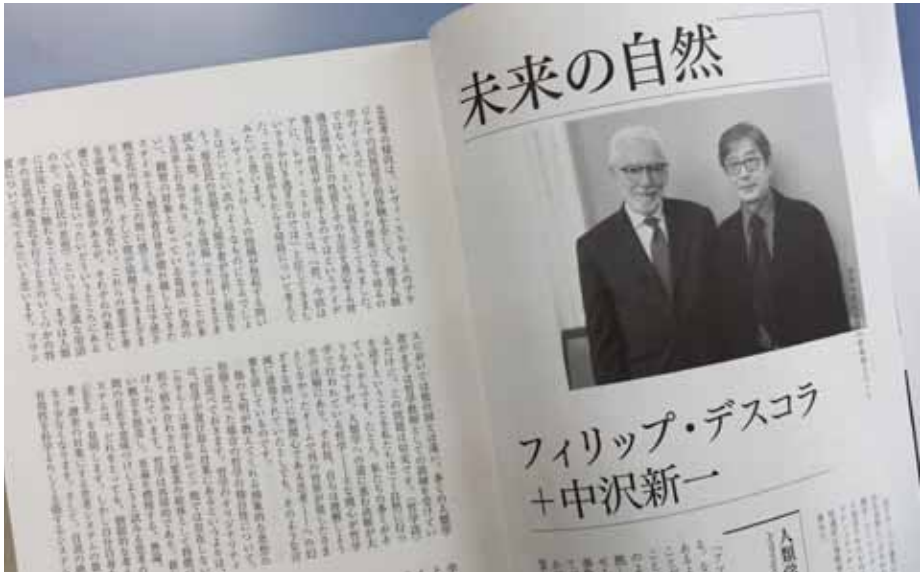
音を奏でるためには
まず心のなかに
響きをつくらねばならない

そして心の像のうつりゆくなかで
動くフォルムと響きの幾何学を
確かに育ててゆくのだ

すると数多の形や音を結びあわせ
まったく未知の像をさえ
つくりだすことができるようになるだろう

まだ見たことのないかたち
まだ聴いたことのない響きを
現の夢のように浮かび上がらせるのだ

mediopos-61
2015.1.15



■フィリップ・デスコラ＋中沢新一「未来の自然」（現代思想 2015・1月号　所収）
（中沢新一「二つの自然」より）
「デスコラ氏が人類学者として前面に据え続けてきた問題は、日本の知性たちがこの１５０年ほどの間、片時も忘れることのなかった主題にほかなりません。夏目漱石をはじめとする文学者にとっても、西田幾多郎に代表される哲学者にとっても、「自然と文化の大分割」という西欧的思考の原則こそ、西欧文明が日本文化に突きつけた最大の思想的挑戦と思われるものでした。／なぜなら、日本文化は「自然に包摂された人間」という根本的な思想に基礎づけられてきました。そこでは自然と文化は分割されるのではなく、相互に通底しあっています。自然が文化の内部に折り畳み込まれ、文化は自然の内奥に包まれていくことが、理性とされてきました。この思想は作家や知識人や芸術家によって表立って表現されてきたばかりではなく、庶民の生活や環境世界の造形のなかに、深く息づいています。それは日本人の無意識の構造をかたちづくっており、料理でも造園でも農業でも漁労でも祭祀でも、はては会社や経済のシステムであろうと、あらゆる領域にそれは浸透していると言っても、過言ではありません。」

私が自然を見る
するとそこには私がいる

私が自然に私を見出さないとき
自然もまた私を見出さないだろう

私はみずからを創り出すように
自然へと向かわなければならない

来るべき自然学のために
来るべき私となるために

mediopos-62
2015.1.16

■アリック・バーソロミュー『自然は脈動する／ヴィクトル・シャウベルガーの驚くべき洞察』（日本教文社　平成 20 年 4 月）
「ヴィクトルは水の性質について深遠な発見をしたことから、「水の魔術師」として知られていた。彼はあらゆる生命の鍵としての水、そして水と森林との非常に重要な関係に深く関心を寄せていた。水を、あらゆる生命プロセスの基盤として、あらゆる生命に栄養と活力をもたらす経路としてとらえていた。また水は生きている実体であり、それは地球と太陽から生じるエネルギーを蓄積し、変換することをおもな役割としていると考えた。ヴィクトルによれば、人類が抱えるあらゆる問題は、水を生命体として見ることができないことが原因なのである。私たちは水の創造プロセスを妨げてしまっているが、水には、いったん敵となれば驚くほどのダメージを私たちにもたらす力があるのだ。／（・・・）静止した水は受動的である。それは形がなく生命がないように見える。しかし動き始めるやいなら、多数の構造面が生じ、神秘的な渦巻き状の小さな構造をいくつも作り出す。水の本質は動くことにある。活発になると生きた状態になり、動くことで、生命をもたらす潜在力が現実のものとなる。」

水は生きている
水は生まれ育ち記憶し運ぶ
水は大地の血液だ

風は生きている
風は生まれ育ち記憶し運ぶ
風は大地の呼吸だ

あらゆる元素は生きている
元素は生まれ育ち呼吸し運ぶ
元素は宇宙を創る栄養素だ

私たちはあらゆるものに生かされている
そしてあらゆるものに死を与えもする
私たちの未来は自然の未来とともにあるのだ

mediopos-63
2015.1.27

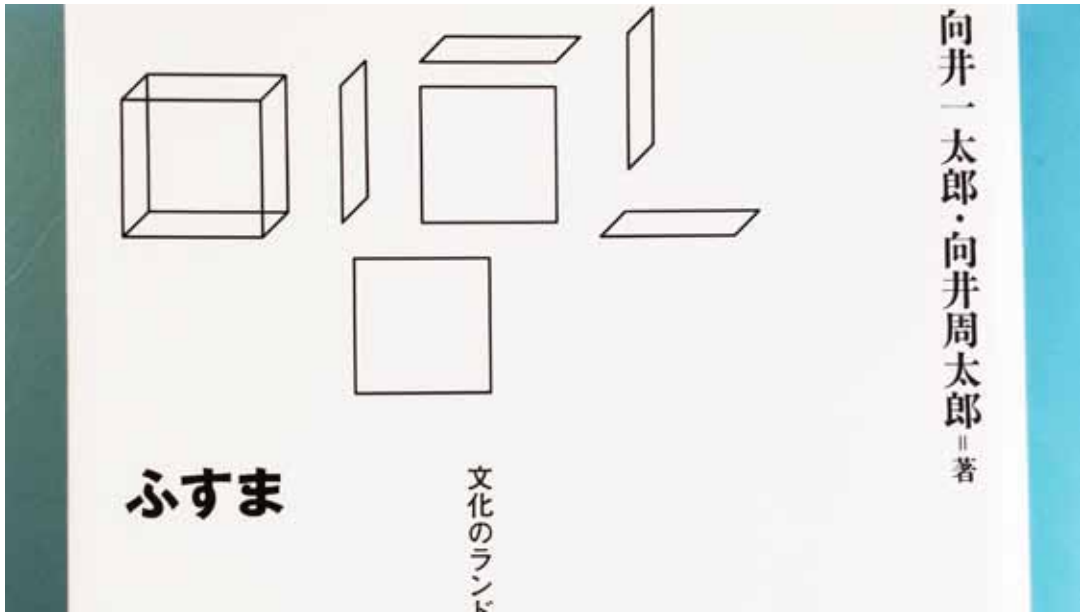
■三浦哲哉『映画とは何か／フランス映画思想史』(筑摩選書 2014.11)
「フランスにおける世界最初の映画興行で、動く映像をまのあたりにした観客たちがなによりも驚いたのは、背景で風に揺れる葉叢だったという。(…) ／スクリーンの後景で、誰に見られるために存在したわけでもない事物が、ほかのあらゆるものと同様に動いている。ゆらめきながら太陽光を反射させる葉叢、その在りようの精妙さを言葉で描写し尽くすことはむずかしい。なぜならそこに映っているのは、人間がすっかり解明したわけではない自然の神秘そのものであり、想像力が決して追いつくことのない何かだからだ。そもそも映画のイメージは、たとえば絵画におけるように人為的に再現されたものではない。カメラによって自動的に保存された後景は、勝手に――人間に対してなかば無関心に存在する。それら光景を見ることに固有に驚きがあり、あるいは、そのようにして「意味」から束の間、解放された事物そのものを見ることのやすらぎというものがあるのだ……。／さて、しかし。映画が差し出す光景に、かつてひとがこのような感動を覚えることがありえたのだとして、問いたいのは、いま私たちは同様のイメージに、心から驚き、感動できるものだろうかということだ。」

驚くことはたやすいことだ
ただいちどだけのことなら
ほんとうに驚くことのできる力は失われて久しい
いつもはじめてのように驚くことのできる力だ

世界は神秘に満ちている
水がゆれ光がきらめく
それが深い驚きになるならば
存在の神秘はあなたとともにある

人は想像力のぶんだけ
驚くことのできる力を得ることができる
驚くことができなくなったとき
人はみずからを存在の神秘から遠ざけてしまう

mediopos-64
2015.1.18



■向井一太郎・向井周太郎『ふすま／文化のランドスケープ』（中公文庫 2007.4）
「ふすまは寝るさいの衣である衾から出て、衣偏に奥、「襖」と書くようになった。衣は包むものですから、この漢字には、「奥を包む」ということが含意されているわけです。衾障子のふすまに、いつからこの襖という漢字を当てるようになったかはわかりませんが、衾（ふすま）はもととも寝具ですから、この襖の旁の「奥」はふすところ、「寝所」を意味しているのではないかと想像されます。」
「日本では、古代から神籬（ひもろぎ）といって、神を招来する場所として、四方の隅に棒状のものを立てて、それにしめ縄を張って囲い、聖域をつくるということを行なってきましたが、この「しめ縄を張る」という行為のうちに、すでに「ふすま」の原風景を見るような思いがします。（・・・）ぼくには、このしめ縄に下がる御幣と、寝所を包む帷帳や障子帳の「帳」とが日本文化の深みにおいてはつながっているように思えてならないのです。御幣は太陽の光彩あるいは稲穂の光輝の象徴だといわれますが、同時に光を内に秘めた帳の象徴にも思えます。／「奥」は始原的には神の降臨する場所あるいは神の座とつながっていたのではないでしょうか。」

帳のなかで
夢を見て

光を内に
秘めながら

静かに育ち
光は満ちて

蛹のように
時を経て

羽を広げて
光のなかへ

mediopos-65
2015.1.19

■若松英輔『神秘の夜の旅』(トランスビュー　2011.8)
「人間を見つめるのは「物」である、と越智（保夫）は言う。「光のごとくみち拡がりつつ、折ふしおぼろげな言葉を洩らしははするが、我々が決してその全貌を見通すことが出来ない『物』」、とも彼は記している。「物」は「光」のように万物を照らし、「夜」のように世界を包み込む。ときに「おぼろげな言葉」を放つが、人はそのすべてを知ることはできない。彼にとって「物」とは、特定の事物、事象を指す言葉ではなく、現象界の彼方から浮かび上がる未知なる到来者の建言を意味する。ルオー、リルケ、チェーホフなどの先人、あるいは小林秀雄やガブリエル・マルセルといった同時代人も、越知保夫には、「物」への窓にほかならなかった。越智は、哲学者とは、超越と人間との「媒介者」でなくてはならないというマルセルの言葉に触れているが、それは、越智が自らに課した義務でもあった。」

彼方より物は来たりて
わが深みへ

内奥より物は来たりて
わが前に

光のように照らし
夜のように包み

われを回心させる
不思議の言葉を放つ

いかなるときも
ともに歩め

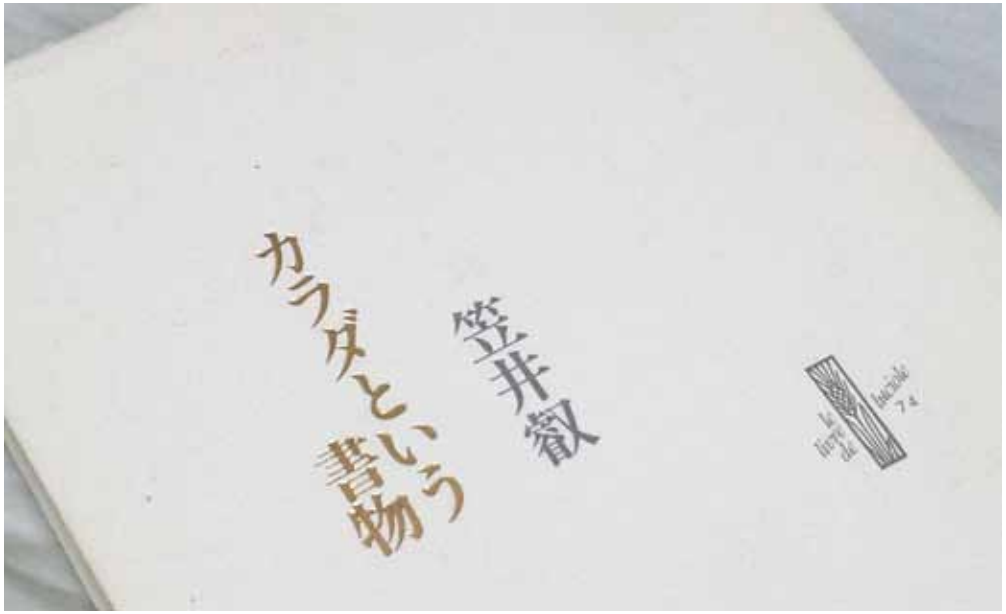
いかなるところでも
ともに語れ

われはなにを観るか
われはなにを聴くか

物は来たりて
わが名を呼び

物は来たりて
われとむすぶ

mediopos-66
2015.1.20



■笠井叡「カラダという書物」(書肆山田 2011.6)
「人間のみが、世界に対して、カラダに対して、物質に対して、その内部から関わることのできる唯一の存在です。そして科学的方法では絶対に不可能な、物質をその内部から知覚し、それを認識するのです。」
「「私」は、宇宙の始まりから、否、それ以前から一度も途切れることなく存在し続け、今、私のカラダの中で、「ワタシ」と響いたのです。ですから私は、「大気の内部」にも。「大地の内部にも、「海の内部」にも、「植物や動物や爬虫類の内部」にも、存在し続けています。
／事物を外から眺めるときと内から眺めるときとでは、その姿はまったく異なっています。「バラの内部」には、大空も星星もそして「人間たちが見る夢」も映し出されます。それは、バラが花弁の一つ一つを眼にして、世界を眺めているからです。すべての植物、すべての動物たちは、「宇宙の感覚器官」です。そして、宇宙というのは、全自然界の内面世界のことです。自然界に存在するすべてのものが、「宇宙の感覚器官」として生きています。」

みずからを見るために
世界は存在している

そのことを忘れたとき
物から霊が失われ

私もただの
カラっぽの箱になる

私が目覚めるとき
世界も目覚める

薔薇は目覚め
星たちも目覚める

そしてあなたは私と
不思議のむすびを踊る

mediopos-67
2015.1.21

波は打ち寄せ
月は地球をめぐり

季節はうつり
地球は太陽をめぐり

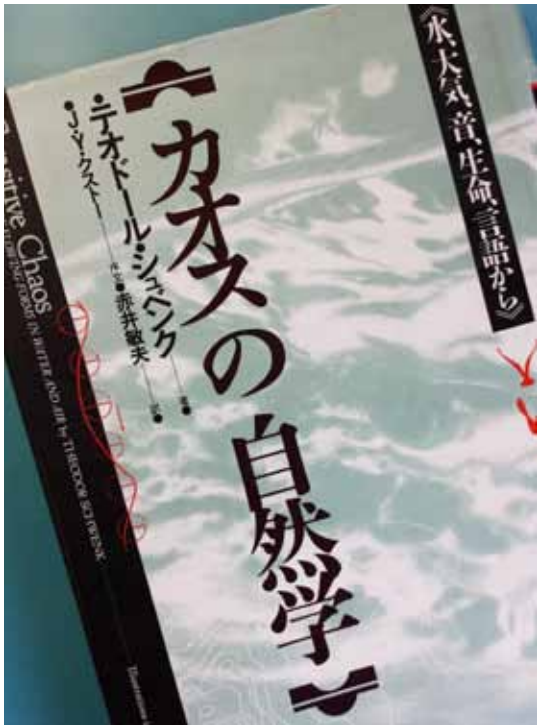
太陽は熱を放ち
銀河をめぐり

時と空の間を
静かに呼吸しながら

わたしは永遠をゆく
はるかな旅人

■クラーゲス『リズムの本質』(みすず書房 1971.4)
「波のリズムや世界歴史の大なり小なりの周期のリズムを信ずる者は、嵐や洪水や雷雨に接して、地球自身が魂をもっていると考え、地球がそうなら太陽系が、太陽系がそうなら全宇宙が魂をもっていると考えざるをえないだろう。(・・・)／その結論はロマン主義の予感と一致して、宇宙の対極性を要求するだろう。その対極性によって、月と地球、地球と太陽、太陽と銀河系の相関性が、他方、平静と動揺、熱と光、さらに空間と時間の相関性が体験されるだろう。他のすべての対極性を包括する最後に挙げた対極性のみになお注目してみよう。――現実が事象(Geschehen)の実現ならば、現象の空間性もたえざる変化を免れえない。生命をもつといわれる宇宙においては、形象の時間極とその空間極との関係は魂と肉体との関係に等しいだろう。現実空間は現実時間の肉体であり、時間は空間の魂であろう。しかし、魂が無制限にリズムのなかで現象するならば、われわれにとってリズムの本質を解く鍵となった往来の交替は時間性独自のものであろう。測定の道具としての直線的な秒の単位しか知らない物理学者にとっていかに神話的に聞こえようと、リズムの意義のいちばん下の土台を支える根拠は現実時間の脈動的進行(pulsatorischer Gang der wirklichen Zeit)のなかにあろう。個人の魂はしたがって、リズムのなかで振動するとき、どれほど短い瞬間であろうと、事象の両極を結ぶもの、すなわち、消滅と生成の永遠性とひとつになる。かの神秘主義者＊は、つぎの詩句を見出したとき、おそらく心のなかで似たようなことを思ったであろう。／　時間を永遠となし／永遠を時間となせば／自由となれよう／すべての争いから」
＊かの神秘主義者というのは、ヤーコプ・ベーメ

mediopos-68
2015.1.22



見るためには
見えないちからを
見なければならない

動かないものさえ
見えないちからがなければ
存在できないだろう

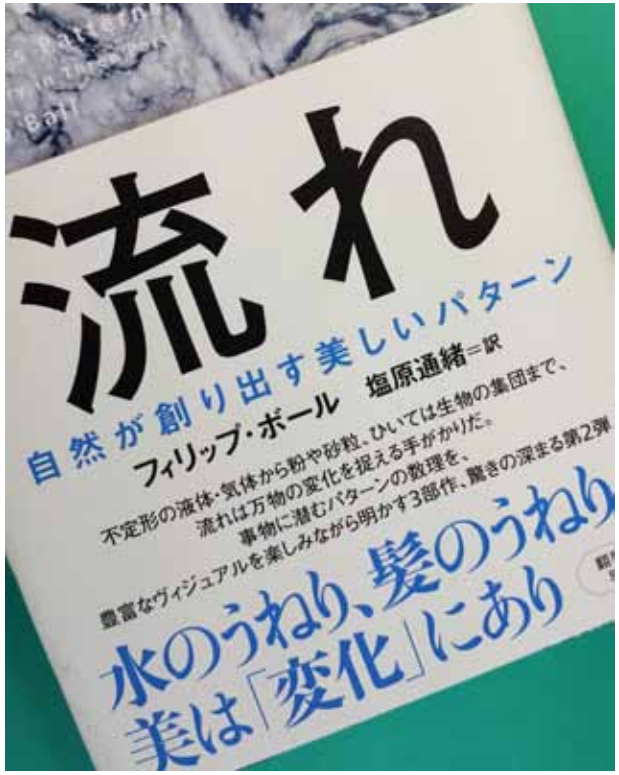
聴くためには
聴こえない響きを
聴かなければならない

真に沈黙しようとすれば
あらゆる音をささえる耳を
もたなければならないように

姿あるもののなかでは
姿なきもののちからが
たしかに働いているのだ

■テオドール・シュベンク『カオスの自然学』(工作舎 1986.5)
「霊的実体は宇宙的秩序の世界から降下し、水と空気の運動を通過して静止形態へと物質化する。運動はこの下降のあらゆる段階において、霊的実体によって元素に作用することを目的とした道具として、不断にもちいられている自らの姿を明らかにするのである。／たとえば胚の発生の過程で、いかにして一つの器官が、液体から漸次的に作り出されるかを観察すれば、われわれの関心は胚種の形成を司る運動――それは不可視の計画にしたがっているのだが――に対して向けられるだろう。もっとも、これらの運動が最終的にわれわれの目に見える形態をとるとはかぎらない。それは多種多様の可能性をとりあつかう陶工の手のようなもので、外部・内部の双方から一つの器を捏ねあげ、その後ふたたび「不可視の世界」へと退いてゆくのである。この運動は、窮極的には不可視の実体の意志と霊に由来するものである。この創造的・形成的運動を通じて、形態の原型(イデア)が諸物質の上に刻印されることが可能となる。いったんこの刻印が完成されると、創造的運動は形態をときはなち、その中に作用としてあらわれる。そして実体化した生物が、それを利用することになる。」

mediopos-69
2015.1.23



■フィリップ・ボール『流れ／自然が創り出す美しいパターン』(早川書房 2011.11)
「動きはパターンと形を生む。動いている水は、おのずと配置を変えて渦をなし、ときにはその渦をきれいに並ばせて、華麗に、かつ整然と、絶え間ない流れを運んでゆく。空気と水の動きは、天と地と海を織りなす。めまぐるしく揺れるガスの隠れた論理は、外惑星に巨大な回転する眼を描き出す。運動中の粒子の衝突からは砂漠の砂丘が生じ、丘はよりわけられた粒で縞模様になる。それらの一粒一粒に、隣の粒に反応する力を与えてやれば――その粒が魚であっても、鳥であっても、バッファローであっても――無限とも思えるほどの多様なパターンがあらわれる。それらはすべて、だれから命じされたのでもない、だれが計画したのでもない、およそ信がたい共同作業の所産なのである。」

変わらないものを
探し求める者よ

変わることを
嘆く必要はない

変わらないことが
真実なのではない

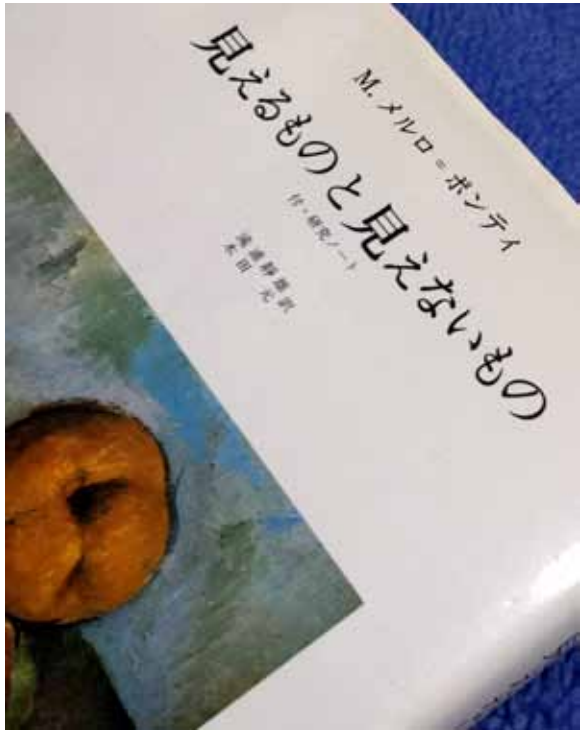
変わりながら
美しいことが真実なのだ

美しさに限りはない
変わるからこそ限りがないのだから

変わりながら
永遠であることが真実なのだ

変化のないところに永遠はない
刹那にさえ永遠は宿るのだから

mediopos-70
2015.1.24



わたしの　あなたに　遭うために
わたしを　ぐるりと　裏がえし

あなたの　わたしに　遭うために
あなたを　ぐるりと　裏がえす

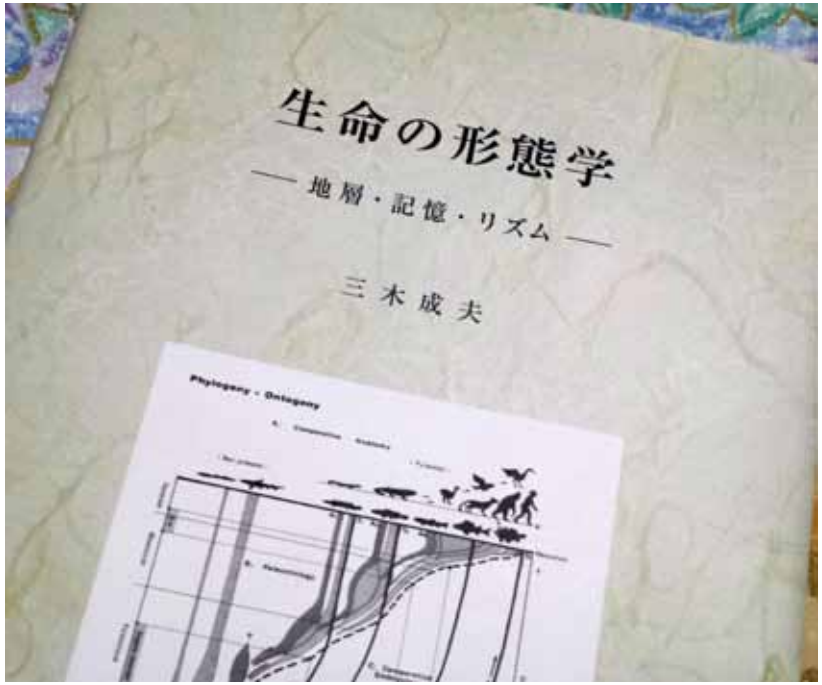
わたしは　あなたに　手をのばし
あなたの　うしろから　参ります

あなたは　わたしに　手をのばし
わたしの　うしろから　参ります

夜明けの晩に　裏返り
わたしと　あなたが　出遭います

■M . メルロ＝ポンティ『見えるものと見えないもの　付・研究ノート』（みすず書房　1989.9）
「転換可能性――裏返しになった手袋の指――ひとりの目撃者が表裏両方のがわにまわって見る必要はない。私が一方のがわで手袋の裏が表に密着しているのを見るだけで、私が一方を通して他方に触れるだけで十分である（領野の一点ないし一面の二重の「表現」）、交差配列とは、この転換可能性のことなのである。――／＜対自＞の＜対他＞への移行がおこなわれるのも、この転換可能性によってのみである。――実のところ、私と他者が事実的なもの、事実的な主観性として存しているのではない。私と他者とは、二つの隠れ処、二つの開在性、何ものかが生起してくる二つの舞台なのである。＾＾そして、これらはいずれも同じ世界、＜存在＞という舞台に属しているのである。／＜対自＞と＜対他＞とがあるわけではない。それらはたがいに他方の裏面なのである。だからこそ、この両者はたがいに合体するのである・投射―取り込み。――私の前にくらかの距離をおいて、私―他者、他者―私の振替えがおこなわれる線があり、境界面があるのである。――／与えられたただ一つの軸、――手袋の指の先は無である。――しかし、それはひとが裏返すことのできる無であり、そのときひとがそこにもろもろの物を見ることになる無なのである、――否定的なものが真に存在するただ一つの「場」は襞であり、つまり内と外とがたがいに密着しているところ、裏返し点である。――」
（研究ノート」より「交差配列――転換可能性」）
＊交差配列：キアスム

mediopos-71
2015.1.25



ヒトのからだには原型があり
はるかな時を遡っていけば
おなじ根源を持つように

ヒトの魂にも原型があり
その道を分け入っていけば
おなじ根源を持つだろう

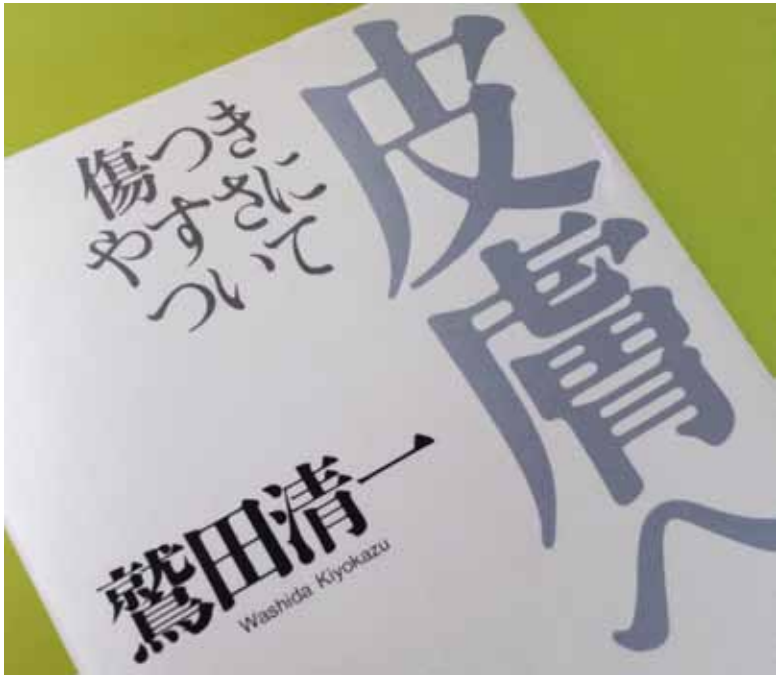
同じ根源をもちながら
ヒトは少しばかりの違いを増幅させ
喜び憂え諍いを繰り返す

同じと違う
好きと嫌いが同居して
殺し合いさえしてしまう

わたしとあなたの同じと違う
超えられないか超えられるか
超えてようとするのも原型のひとつであれば

■三木成夫『生命の形態学／地層・記憶・リズム』(うぶすな書院　2013.12)
「たとえば街角で、どんなに怪奇な容貌に出くわすことがあったとしても、われわれはただちにこれをヒトとして認めるであろう。いってみれば、いかなる人間の顔貌容姿にも、そこには人間としてのある根強いかたちが存在するのである。／人間のからだの“内なる構造”には、こうして“外なる容姿”における時と同様に、そこには、なにか根源的なかたちの横たわることが明らかになってきた。解剖学者たちはこの「根源のかたち」を“シェーマ”としてめいめいのあたまのなかで図像化するのであるが、かつて詩人ゲーテは、このかたちを「原形 Urbild」と呼び、“個々のかたち”は、すべて、この原型の「変身 Metamorphose」をとげたものとして眺めた。かたちの学問いいかえれば、ゲーテ「形態学 Morphologie」の、それは根底をなす見方でなければならない。人体解剖学とは、以上のことから、このからだの構造のまさに「原型」を明らかにする、したがって「形態学」の一分野であることがうかがわれる。／ところでこの“かたち”とは、これからも折にふれて繰り返すことになるが、それは欧語の das Bild（独）,la forme（仏）,the shape（英）の名詞がそれぞれ動詞の billed,former,shape に由来することからも明らかのように、それはあくまでも、“かたちづくる”という過程の上にのみ成立するものであることがうかがわれる。したがって、このからだの構造のもつ根源のかたちもまた、それはこの地球上に生命が誕生していらい、いってみれば三十億の歳月をかけて形成されたものであって、そこにはその歳月の時々刻々が秘められた年輪としてすでに刻み込まれているのでなければならない。」

mediopos-72
2015.1.26



■鷲田清一『皮膚へ／傷つきやすさについて』(思潮社　1999.11)
「分かるということが分からなく、だから分かるということから切れたところで触れていたい、というのはしかし不可能な夢である。分かりえないことを知ることがほんとうに知ることであり、異なることを知るのがほんとうの理解だということもおそらくはあろう。でも、だったら分かりたいというのは無意味な欲望だということになる。／じゃあなぜ無意味に引き込まれるのか。なぜ他者に傾くのか、他者に心をなびかせるのか。他者との交通の不可能性をあらかじめ知りつつ、なぜひとは他者を妄想するのか、その妄想された他者に強く密着しようとさらにふたたび夢見るのか。／(・・・)他者の不在と他者の切迫。この二つは<自己>という存在の空隙となんらかのかたちで繋がっている。だったら、「他者の不在」という困難はどこかでこの「わたしの身体」という困難に繋がっているはずだ。」

分かれているから分かる
その矛盾のなかを生きる

わたしとあなた
分かれているからわかる

それとも
分かれていないからわからない

わたしとあなた
からだとこころ

交差配列のように
矛盾を結ぶメビウスの環

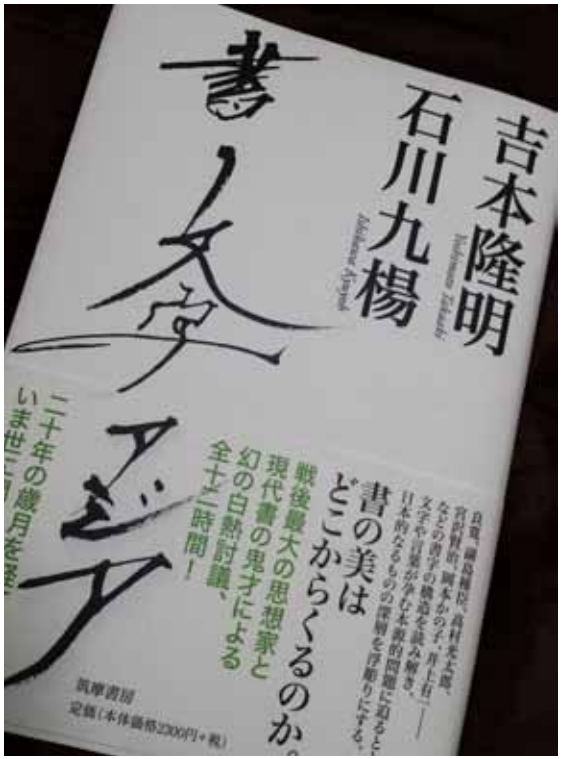
求めるということは
欠けていることなのだろうか

わたしはあなたを欠いている
欠いていなければ求めないのか

わたしという困難は
あなたという矛盾のまえで立ち尽くす

分かれて分かろうとするように
傷つくことを恐れながら

mediopos-73
2015.1.27



■吉本隆明・石川九楊『書　文字　アジア』(筑摩書房 2012.3)
「吉本／言葉というものを考えるときにですね、言葉以前の言葉というところまで考えを突きつめていきましてね。結局いちばん確からしいと思えるから、そう考えるようになったんですが、言葉以前の言葉を考えれば、＜内蔵の言葉＞と＜感覚の言葉＞というところまでいっちゃうのです。＜内蔵の言葉＞というのは、ぼくが『言語にとって美とはなにか』を書いたときに、自己表出といったものです。内蔵の言葉以前の言葉というのと、感覚の言葉つまり語感からつくられてゆく言葉以前の言葉というのが、結局は両方は違うんだということ。そのふたつが綯い交ぜの状態になって表出されてくるということ。言葉以前ということを考えていけば、そうなっちゃうんじゃないかと思ったのですけどね。」

樹には根があり幹が伸び
枝を伸ばし葉を茂らせていくように

言葉にもその根があり
やがて花が咲き実をつけてゆく

言の葉を豊かに茂らせ
美しい光を受けるためには

地に根を張り地中から
水を吸い上げなければならない

けれどその力が衰えてしまうとき
言葉はその輝きを失ってしまう

そして死んだ言葉と生きた言葉さえ
私たちが見分けられなくなったとき

私たちは言葉を出力するだけの
自動機械と化してしまうのだ

mediopos-74
2015.1.28

■頼住光子『道元／自己・時間・世界はどのように成立するのか』（ＮＨＫ出版　2005.11）
「「空そのもの」は、シャカによってさとられ、仏教においては、多様な「教え」として言語化された。しかし、真理と言葉との関係を表す「指月のたとえ」によって示されているように、真理の当体である「空そのもの」をさし示す言葉は、一義的なものとしては決められはしない。たとえ、どのように、包括的に言語化しようと、「空そのもの」は、完全に言語化されることは不可能であり、その時、その場のコンテクストによって、さまざまな言葉で表現されなければならない。／道元は、そのような言葉の一つとして、「青山常運歩」という言葉を提示する。山が歩くという、常識を越えたこの言葉は、「一水四見」などと同様に、視点の置き方によって見えてくる世界が違うことを説き、人々の持つ先入観を打ち破り、日常的な固定化された意味の枠組みを揺るがそうとする。／そして、さらに、「青山常運歩」というこの言葉は、自己と、「山」に象徴されるようなこの世界の諸存在とが、ともに同時に歩く（＝修行する）という次元を切り拓く。世界のありとあらゆる存在と自己は、同時に修行し、さとるというのである。このような同時の修行と「さとり」とは、まさに「空そのもの」から現成させた、「空ー縁起」なる世界において成り立つ。「空そのもの」から、自己が存在を「時」として意味付け、自己と関係づけて、「空ー縁起」なる世界全体を現成させる。まさに、これこそが、自己と時間と世界との成立なのである。」

私が歩いているのか
山が歩いているのか

葉が揺れているのか
私が揺れているのか

水が流れているのか
私が流れているのか

空が広がっているのか
私が広がっているのか

風が吹いているのか
私が吹いているのか

雨が降っているのか
私が降っているのか

火が燃えているのか
私が燃えているのか

私が見ているのか
私が見られているのか

私が聴いているのか
私が聴かれているのか

私は裏返された私とともに
包み包まれ創り創られてゆく

mediopos-75
2015.1.29

■小林正佳『舞踏論の視角』(青弓社　2004.1)
「これまで、わたしは、踊ること、あるいは踊りについて考えることをテーマとしてきた。といって、これから述べていくように、わたしは何か「舞踏」と呼ばれる、ほかとは違った特別な行為があるのだというふうに考えているわけではない。舞踏とは、何か固定的な対象として捉えられるようなものではなく、むしろ、人間の、あるいは何かの動きを捉えるこちら側の眼差しに深く関わるような概念であるとわたしは理解している。日常生活のなかでは意味や効用の文脈にかすめとられてしまっている、一つひとつの行為そのものに注目する。そのとき、生を織りなす一瞬一瞬の具体的動きが「動き」それ自体として浮かび上がってくる。そのような「動き」の現前を、ここでは「舞踏」という言葉で捉えていく。意味からも効用からも独立した、動いて＝生きて＝あることの現れ。／「生きる」とは、不断に一つの「軌跡」を描きつづけることにほかならない。とすれば。そうした眼差しのなかでわたしたちは、不断に踊りつづけているといえはしないだろうか。／こんなことに気づいただけで、どことといって普段と変わりもしない自分自身の行為さえ、なんと新鮮に映ったことだろう。／パンを食べる。学校に行く。焼き物を作る。／「何々をする」といってしまえば普段はそれだけですんでしまうそんなありふれた行為ではあるけれど、しかし、どうやって食べるのか、どうやって行くのか、どうやって作るのか、そのことこそ大切になってくる。しかも、サンドイッチにしてとか、電車に乗ってとか、薪の釜でとかいうこと以上に、どんな姿でとか、どんなふうにからだを動かしてといったことが、そこでは問われてくる。」

私は　歩く
私は　食べる

私には　自分の姿が
見えていて　見えていない

私は　話す
私は　聞く

私には　自分の声が
聞こえていて　聞こえていない

何　ではなく
どのように　なのだ

見知らぬ私が　私の奥で
踊っている　歌っている

見えない私の　見える舞へ
聞こえない私の　聞こえる歌へ